

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

⑧

稲穂が頭を下げて爽りの秋を告げ、空にはトンボが舞っている。乾いた空気が季節の確かな移ろいを感じさせる。

住田町上有住はまた初秋であったが、九月中旬の五葉山は二月月も早く季節が進んでいた。夜明けの真夜中、五葉山登山をしたときがそうであった。

甲番は、午前八時から午後四時まで、乙番は、夕方四時から真夜中の十二時まで、丙番は、夜十二時から翌朝の八時までである。

その日は乙番帰りであった。上有住通勤会の仲間、上有住の天獄から通う河村貞雄さんと五葉山登山をすることにした。夕方から真夜中まで仕事をし、その足で五葉山登山をしようというのである。

昭和三十年代のはじめ、私は釜石市内の釜石製鉄所の関連会社に勤務していた。釜石製鉄所はもちろんのこと、その関連会社も二十四時間フル稼働の勤務体制を敷き、甲番、乙番、丙番の三交代制であった。

釜石駅から上有住駅までは列車で、登山口である中峠まではバイク。後ろの座席には河村さんが乗っている。

登山開始は夜中の二時頃だったと思う。電灯で登山道を照らしながら登る。特に食べ物も持たず、着るものといってもヤッケくらいで至って軽装備である。歩き始めて四時間。時計が五時になろうとしていた頃、空が少し明るくなってきた。

中、傘をかぶりながら晴れることをかすかに期待して頂上を目指した。同じ天獄地区の小松春義さん、今は「深野安男さん」、そして私の三人である。

しかし雨は降り止まず、稜線に点在するお目

登山に思う「豊かさ」

住田町上有住

皆川 義男

朝靄(もや)の中に見えてきたのは山いっばいに広がる紅葉だった。足下がサクサク音がする。よく見ると霜柱であった。十時以上も土を盛り上げていたその見事さを目を奪われた。自然の神秘さを改めて実感した瞬間でもあった。

当てるお花畑、シャクナゲの群落を眺望することのできなかつた。雨ですっかり濡れてしまったシヤクナゲがとも生き生きとしていたのが印象深い。

源泉であり、精神風土がそこにあったからかも知れない。

こんなこともあった。丙番帰りの夏の朝、通勤会の仲間雨の降りしき

釜石通勤会の中には、大松から桶ヶ沢、水無沢を通り山頂に向かう大松コースを四時間で下駄を

地下足袋を履き、水筒が珍しかった時代に、「カモメ」の焼酎ビンに水を詰め、使い古した毛布や家族の者が兵隊として持ち帰った飯盒(はんごう)をリュックサックに入れ、登山をしたあの時代。決して豊かではなかったが、おおらかさ、

いま考えてみると、日本経済が戦後復興を果たし、豊かな時代を求めた昭和三十年代、二十歳代であった私も含めて馬鹿げたことを本気になつてまじめにやり遂げる。

思いやり、いたわりがあり、遊び心にも溢れていた時代であったように思う。

【執筆者プロフィール】
住田町上有住在住。六十八歳。二十代から退職する五十代後半まで釜石市内の製鉄所関連会社に勤務。いまは野菜や花作りを忙しい。大工仕事や竹を使っての太鼓、柳樽、木彫りの小さな仏像なども作る器用さ。五葉山自然倶楽部の忘年会では股旅ものの踊りが好評だ。

そんな社会風土がこの時代にはあったように思う。奔放さ、磊落さ、ハングリー精神の旺盛さが戦後の高度成長を支える

私は五葉山や五葉山麓を被写体に捉え、ファインダーを覗くとき、改めて考えていることがある。時代の変化と時代が求めてきた「豊かさ」について。豊かであること、豊かに生きること、その



上有住通勤会の仲間たちと登山し、黒岩から周囲の眺望を楽しむ若き日の筆者

リレー エッセイ